思いもかけない人から電話がかかってきた。 天草で財宝探しを始めて四年目 一九七七 (昭和五十二)年九月のこと。 勤務

きみがやっている天草よりもずっと可能性は高いよ」 だろうか。詳しいことはまだいえないが、例の徳川幕府の御用金なんだ。少なくとも、畠山だけど。実は、ぼくが掘りたいと思っているところがあってね。手伝ってもらえた

騒がれて関係者に迷惑をかけてしまう。極秘にやりたいので、金で人を雇うのは具合が悪 「資金を出すという人物はいるが、ぼくが直接関わっていることがマスコミに知れると、 んだ。三、四人は必要だから、きみのグループが実働部隊として参加してくれればあ 一瞬、全身に電流が走り、 もちろん、交通費や宿泊費などの実費は出すよ」 体の芯がブルッと震えたのを、 昨日のことのように思い ず。

「ぜひお手伝いさせてください。いえ、先生、手弁当でもけっこうですから

かった。 れた打ち合わせの日時と場所をメモして受話器を置いたが、しばらくは興奮がおさまらな ぼくは、とっさにそう答えていた。「手弁当」なんて、たぶん初めて使う言葉だ。 指定

金とは。 (大先生がおっしゃるからにはまちがいない。しかも、日本でいちばん有名な徳川 いよいよホンモノの宝を手にすることができそうだぞ)

成だ。そのほか、ジャンルはちがうが、 話』(毎日新聞社刊)だが、 校』(全六巻)の著者としても名高い。 伝説に興味をもち、全国の有力伝説地を訪ね歩いて、調査の成果をまとめた本を何冊も書 いていた。ぼくが天草四郎軍の財宝のことを知ったのは、『足もとにあるかもしれない 後に出版される『新・日本の埋蔵金』(いずれも番町書房刊)が、畠山氏の研究の集大 山清行氏は一九〇六(明治三十九)年、北海道石狩町の生まれ。大正 一九七三(昭和四十八)年刊行の『日本の埋蔵金(上・下)』 かつて市川雷蔵主演で映画化された『陸軍中野学 の末から 宝の

名実ともにこの分野の最高権威。一攫千金を狙う人たちにとっては、教祖様のような存在 だったぼくは、 うわさを耳にしていたから、直接話を聞きたいと願ってはいたものの、まだ二十代の若造 だったのである。でも、情報を求めて訪ねていっても、たいていは門前払いを食うという そもそも、「埋蔵金」とか「埋宝」といった言葉をつくったのは、ほかでもない畠山 おそれ多くて近づきがたかった。 氏で、

折り返しもらった手紙は、 ころ、運よくそれが受賞作に選ばれたので、早速、掲載誌(一九七七年二月号)を送 ルで文章にまとめ、 最初の二年間の発掘の経緯を、『三角池探検記・天草四郎軍の遺宝を求めて』というタイト しているのだから当然の礼儀と心得て、調査のもようを手紙で報告していたからだ。また、 ぼくが仲間と天草を掘っていることを、氏はよく知っていた。その著書をもとに 日本交通公社が発行する雑誌『旅』の 次のような内容だった。 「日本旅行記賞」に応募したと つ

興味があったわけです。 しましたが、同時に私としましては、どんな探索方法をとっていられるのか、 いただいた『旅』、たいへん興味をもって拝見しました。 て いられるご様子、 たいへん楽しく、 ある意味では安心しました。 金に対する執念というよりも、 といいますのは、 よく書けている レジャ 私のところへ その点でも ー的ムー ので感心

込み、 つけて ったん なると思います(後略)」 記のように、レジャー半分なら、ちょっと他には類のないスリルとロのです。できるだけ埋蔵金探しなど、若い人にはしてもらいたくない <u>つ</u> に恵まれて発見する者もあるのですが、出れば出るで、競馬で大穴を当てたと同様、『もう というので、また掘り続け、 間か てくる さらに借金を重ねて、食さえ満足に口にできなくなって死ぬというような者も多い ということになり、 らも 『そうら、このとおりあったではないか』と、あざけった連中を見返してや 始めると、もう 相手に してい とい 人たち う され たわけです。埋蔵金というやっよ、…、血眼の連中が多く、若いあなたが、そんなふうに迷し、ほとんど資産を使い尽くし、借金もきかなくな なくなる。 せっかく取り返した発掘費用どころか、 もう一鍬で、やめることができなくなり、 ついには窮死するというようなことになります。 そうなると、 またそうなったで、 -で書いて 儲けた分まで全部 何とか小判一枚 そのため、人か のですが、あ マ い込むことでもあ つ ンに富 るように、 中には幸運 とか だも の旅行 りたい いでも見 5 つぎ

れる相 かく、ぼくにとっては劇的 手から、 う Ø だ。 直々に電話がかかってきて、 な展 開 に思えた。こちら しかも有力な場所 から は の発掘を手伝っ 連絡をとることも てくれ は な か

金銀が海 され たと であるとい **(群馬県)に運ばれて隠された。それが、** いう説 江戸 にどっと流出するのを避ける とがあ 城内 徳川氏を守り抜くために、 と、少し時 の 3 御金蔵をはじめ、 代をさか 各 た のぼって、 が、世にいいり集め 官軍 めに一時 ·(新政 疎開 大老の井伊 府 う「徳川幕府御用 5 れ させたも 軍)

との決戦に備え た総額 直弼が、 のが、 およそ四百 軍 金 埋蔵伝 甪 国により日本の て用 万両 金として流 意した軍 説 0 金 用

らすでに百年以上たっているが(一九七七年時点)、 報は いくつかの ル ŀ から 世間 流 ħ その探索は埋蔵直後に始まって まだ誰も発見してはいない。 41 か

二代で発掘 ヨ時の近衛流を大に誘い 代で発掘を行った水野家だ。初代智義氏のあとを継いだ二代目義治氏(智義氏の次探索者としてよく知られているのは、明治の半ばくらいから赤城山麓に住み着き、 たり見学にや 太平洋 柔道 の内 われて見学に行き、 戦争をはさんで深くて長いトンネルを掘 船久、蔵十段ら、さまざまな人が水野家の発掘に関心をもち、援助を忠いままでです。このブレインだった後藤隆之助が仲立ちをして、軍が協力したという。こて見学に行き、トンネルの中に入ったことがある。戦争直前の発掘に って来たりしたらし 4 っている。 一九七四年の暮れに、ぼく の発掘には、 の次男) 申し その 父子

けた。また、御用金は古兵法「八門遁甲」によっ一角では、元警察署長の三枝茂三郎氏が、一九三一角では、元警察署長の三枝茂三郎氏が、一九三赤城山麓を掘ったのは水野父子だけではない。 プレ ハブ社長 けた高崎 庄りの 氏らが 輝氏や、 W る。 彼の解 一九三八(昭和十三)年から三十年間発ない。同家から北へ一キロほどの長井小 釈をもとに掘 によって隠されていると考え、 つ た同じ高は へ一キロほどの長な 崎 市 0 桜だられ 在*謎 寛が解 小お川が 言に生 ?掘を続 0

て って いく者も が、 か あとを絶たなかった。つては夜中に車で乗り った。 そう 込ん **^いう連中** にできて、 Ó ことを、 か け いて穴を掘りて穴を掘

告をするのを、 てい H たが、それが終わったところで、 した経歴もあるそう 手はすでに七十歳を過ぎてい を続けて ぼくは国電(現JR 並々ならぬ精力が感じられ 山氏はスプーン四杯分の砂糖を入れたコーヒー いるときに始まったという。 で、 貫禄も相当なものだ。埋蔵 たが、厚い やおらこういった。 た。 の薄 若いころは政治家をめざして社会主義運 天草 胸板、太くて短い首、 -の発 喫茶店で、 掘 金との関わりも、 について、 ・をすす 山 清行氏と向 りながら黙 ぼくが多少追 黒ぶちの眼鏡 憲に追わ !き合 つ 加 て つ 報れ動

「ぼくの本を読んだ人間の中に、埋蔵金を掘り当てたのが 届けをしてくるんだ。 先生のおかげでという手紙を添えて」 いてね、 盆暮 れ になると必ず

析したうえで書かれたものだ。埋蔵金探索者にとっては、まさにバイブルともいうべきも さまざまな証言を残している。 ることができた。そればかりか、 のなのである。 、までは、 て いきなり度肝を抜かれる話だ。でも、そんなことがあっても、けっしておかしくな 4 るが、 埋蔵金伝説に関連する古文書や絵図などを手に入れることは、すごく難しくな 先生が研究を始めた昭和初期には、そういったものが出回っていて、 畠山氏の著書は、 幕末維新のころの出来事を知る人物がまだ存命していて、 人と物証に丹念にあたり、 真偽をよく分 実見す

にかけてのおよそ十 ど偶然の機会に掘り出されて、 **「見つかった埋蔵金で、** 見つかった埋蔵金で、新聞なんかで報道されるのは、ごく一部さ。それらは、ぼくが嘆息をもらしていると、氏は追い打ちをかけるように言った。 偶然の発見もあるし、 ・年間に、 探索者が掘り当てたものもある。 ぼくのところに報告が寄せられたも 「索者が掘り当てたものらうら。11……によん見つかって隠せなかったものだ。実際にはもっとたくさん見つかっています。それらは、工事中な 昭和三十年代から四十年代 のだけ で も百 を

百件 :ですか!

ときは、 たも その二つを含めて、 十八)年には、 多かった。 一)年に、 想像を絶する数字 のもあるとは そんなもので から、千九百枚の小判と 場所が場所だっただけに大きな話 各地でビル 東京・銀座の小松ストア 隅田 三十 川に近 は や道路 な かった い中央区新川 本 が高度成 0 のだ。 東京だけで金銀貨の出土 約七万八千 建設がさかんに行われていたからだ。 の改築工 の日清 か 枚の二朱金が 題になっているし、 にあったそ 製油 ぼく 事現場から二百枚以上 たち (現日清オイリオグループ)本社ビル のころは、 のような探索者 例が十件報告されている。 出てきて、 七年後の 確かに埋 人々を驚かせてい の 一九 の手 小判が発見された 一九六三(昭和三 五六 で掘 の発見 (昭和三十 ŋ り出され る。 例

からである。 ぜ公表されない 外国 では、あらか -スが多い 他人の土地で発見した場合、よくて半分、へたをすれば一割しかもらえいか、その理由は明白だ。正規の手続きを踏めば、発見者の取り分が少 か、 と聞 じめ国や州政府などと取り決めをして、 てい た。 かなり の部 分が 発見者の

った雑談を交わ したあと、 いよいよ本題に入った。

ょう性をめぐって、 ちろ 0 金 一だけど、 手はそん 当時の歴史学会会長の高柳光寿博士と激論を交わしたことにけど、ぼくはあると思っているんだ。以前、雑誌の企画で、 なものあるはずがないという。 論争に負けたつもりは

(4)

してみ せないことには、 自説 の証 明はできな いわけだか 5 ね

ぼくは て、 ちが が e s う な なず 強さが、 11 ったいどこなのだろうか 先生は、長年にわたる 感じられる。 中でも、 幕府 比較 的歴 調 史の浅い伝説だ 金に関する章には 査 で、 確 信 のもてる場所を絞り込んで į かなりペー 客観的 にみても信 ・ジが 割 か S, れ ょ 15 て

超能. š かにあ **万者** 天草 の助けを借 ったが、 0 で 知り合 りて探 神父はまだ手をつけ り当てた赤城山 ったカトリック教会のフラガ Ź の南面にも行ったことがある。教会のフラガ神父のことを思い 11 な 11 はずだ。 41 それ 出 した。 5 神 *c y* 場所

掘るのはやはり赤城山ですか」

ぼくは 単刀直入にたずねた。 猿ヶ京と三国なるな。ところが、 **[峠の中間にある永井というところさい まったく意外な答えが返ってきた** 返ってきた

61 同じ群馬だけど、

温泉 初 めて聞 ~下 社 映画制作 員旅行で猿 ったこともある。 く地名だ。 のサークルで、苗場スキー場にロ ヶ京から三国峠まで行き、 温泉で有名な猿ヶ京はよく その近くらしい。 さらに弘法大師が見 知 つていた。 ケに行ったときに 国道十七号沿 つけ 通過しているし、 ŕ とい 41 わ れ あ る法は り、

ふさが **期まで生きていたからまちがいない。ところが、それが行** 「幕末に くこと ぼく れた謎 の目 べてみたら、 を凝 永井 ケ京の手前にある寺に、 0 視して話す畠 に は 穴があることがわかっている。 そ どうやら永井に移されたらしい。 の ほ か にも Щ も四つの隠された財宝の話が伝わっているとい氏の背後に、オーラが立ちのぼっているように 大量の荷物が馬で た財宝 この が横穴が怪 しかも永 運び込まれ 方不 ī 井 明になって には、 いとにらんだわ 7 W る。 いまは出 目撃者 いる 思えた。 Ō う けだ」 入り で で が は $\hat{\Box}$ な 和 11 ろ が 61 初

「エ ル Щ 氏の • 眼が一段と輝きを増した。ラドって、知ってるかい? ? ぼくは興奮を抑えきれずにいた。 永 井がそれさ。 つ まり黄 (金郷な ん だよ」

41 つやりますか 四人は確実に集められますから」

このときはもう十

くとも来 月の末までには片づけたいんだ。 中八九、黄金を手にした気になっていた。 十一月に入ると雪が降り 出 すか 5

度 は H 現 9 実的 -の埋蔵 だが 金研 埋蔵金探 究の権威である畠山清行先生が、確信をもつ場所を掘るのだから。 しそのも 61 や、 何百 のはすごく現実味を帯びていた。なんとい 億かになるだろう。 その金 一額は、 くた いっても、 ちにとっ て

のことだ。 二十 現在 そのころは 0 判 六のひっそりとした集落は、 車道が全面開通したのは、 国道十七号をバスで猿ヶ京まで行き、そこからタクシーで十五分ほどで着く。 0) 山 目的地は利根郡新治村(現みなかみ町)永井。信越線の後閑駅から旧三国街道、[に埋もれる夢を見ながら、ぼくたちの群馬通いが始まった。その年の十月初旬 十七号が関東と新潟を結ぶメインルートだった。 猿ヶ京温泉と三国峠のほぼまん中の国道沿いにある。 それよりずっとあとの一九八五 いが始まった。 一(昭和 六 + 年 だか 戸数 5

r.J だん 有名 も大型トラックが な ざし スキ てや ^ つ 向かう首 て来る車 ひっきりなしに行き で 巻 っぱ か ら 0) 41 になり、 来して 車 が 長 とくに冬場は、 たが、 i s 列をつく 行 楽シ 苗場、 ズンともなると、

パス) とし て重要な役割を果たした。 の軍道とな 険し 通り」と「三国通り」があり、 重要な経済ル い山越えにはなるものの、 「塩の道」として知られ ってからは、人や物の往来がさらに盛んになった。の道」として知られていた。それが中世の終わりに] } つまり「金の道」は、 距離は最も短かったので、 この三つを「佐州三道」 メ インル 1 脇ゥと 往ゥい 0 近世になっ 上杉氏 った。 「信州 べべ イ 中 通

もなって売却され、 の二階家で、珍しい めほとんどの家が焼失したが、本陣は翌年に再建された。 これを利用 づけられるいっぽう、 表側 沿いの家並は白壁で統一されており、予備知識をもって眺めれば、参勤交代の宿の縁を支えた「持な送」が残されているだけである。売却され、いまはわずかに一枚の写真と一枚の平面図、それに波と兎の彫刻のあで、珍しい柿板ぶきだった。しかしこれも、昭和八年に本陣の笛木家の移転にとどの家が焼失したが、本陣は翌年に再建された。間口十五間の壮大な平入切妻造 九 ï (元禄二) 年、 宿場として栄えた。 治本陣が置かれると、長岡、 一八六○(万延元)年に大火事があって、 新発田など越後七藩と佐渡奉行が、越後米の関東への流入口としては 入口として位 本陣をはじ

般の通行者は、そんな永井の歴史に関心をもつ機会がない。もちろん、莫大な財宝が隠や、本陣の跡にある写真と図面の掲示板、与謝野晶子の歌碑などは人目につきにくく、 根をかすめるように走っているから、地元の観光協会が立てた畳一畳分ぐら場として栄えていたころの面影を見いだすことができるだろうが、現在の国 れているなんて、夢にも思わないはずだ。 旧街道沿 山の国道は: 莫大な財宝が隠さ e s 0 解説 集落 **影看板** 0) 屋宿

相 俣 の 海 、 ま た 、 をまつる がわからなくなっているのである。 を利用した可能性 の決 相当するからだ。 起こって :ら持ち出された十数万両の御用金が、これではないだろうか。 が何 山氏 の海円寺に、 ほぼ 戦 を三国峠で迎えることを想定して運んだ軍用金とも考えられる。 その調査 「十二神社」ではないかという結論に達した。 は、赤城山麓に残る埋蔵金関係文書を調べているときに、 を表す数字かということだ。いろいろ当てはめて考えてみた末に、これ)からだ。実際に、三国峠では一八六八(慶応四)年春、会津軍と官軍数字が一致する。ふつう、「黄金一枚」といえば大判一枚のことで、こ 黄金一万枚」と解読した。「さるがけふ」は猿ヶ京にまちが いる。 点がある。 大量の荷物が運び込まれ、それが数日後に寺の境内から姿を消 の途中で、 調べてみると、猿ヶ京付近には十数カ所 重大な事実を探りあてた。 武器・弾薬だったという説もあるが、 幕末に、猿ヶ京の少し手前 御用金を埋 謎文の「黄 めた目 ある の十二神社 謎 な 幕府方が 江戸 印とし 文を「さる 4 0 の金座 金 があ 軍と れが ï て、 二万 が 山 題は にある っった。 0 枚 行方 官軍 . の神 •

とんどの家 そこで、 の十二神社 予定地 が海円寺 ケ京か 地下 され 0 の の地下三メ だ。 ら三国峠に に 0 檀家 た は これが 九十メ いま 謎 である永井が浮上した。ここにも十二神社は、峠にかけての街道筋をくまなく調査した結果、 に 0 0 一回 卜 玉 横穴があることがわかった。 道十 ル 1 目 のところに、人の手によって掘 一の発見だ -七号の工事中、永井の蛇原,あることがわかった。 一九 争 が 地下道で、 った。工事 たの 関係者 ŋ 用 が 山。四 道 みた 中に 腹にぽっか られたとしか はある。 留 は 入 なも 和十 ってみる ヶ京まで完成 のは一カ <u>六</u>) 年、 しかも、 をは りと穴があ 2思えな ٤ め 永 41

工事 たらずのうちに埋められてしまった。 掲載されたりしたが 何を目的として掘 のだ。 ٢ から二十一年後、三国峠にトンネルを掘り、 ルほど猿ヶ京方面に下った、 このときは、 めを迎えた一九六二(昭和三十 った穴なのかよくわからないまま、 本陣の蔵の裏から山に向かって掘り進めたらしいというだけで、 馬大学の教授がやって来て調査 標高八百メートルちょうどの地点で、 占 年秋のこと。 関東と新潟を結ぶ大動脈 工事の進行を優先させて、 したり 前回穴があいた場所 新聞 や週刊誌に またもや穴が とし から五十 て 記事が ひと月

このことを知ったとき、畠山氏は身震いした。

(御用金の隠し場所は、この穴をおいてほかにない!)

幕府御用金に関するいい伝えは何もない。 件は『永井本陣日記 利用することはほとんどなかったらしい。 前に述べたように、 金を江戸へ運ぶか佐渡へ持ち帰るか迷っていたが、ある夜、黄金は忽然と消えてしまった。 しかし、江戸にはすでに薩長の討幕軍が入ってきているといううわさ。一行は危険を感じ、 (宝暦元)年の高田地震の際に、信州通りが使えなくなり、この永井を通ったとあるだけ 一つは、 ところが、もっと驚くべき秘密がこの村には隠されていた。不思議なことに、 とはいえ、 これも幕末のことだが、佐渡から江戸に御用金を運ぶ一行が永井に投宿した。 幕末のどさくさで記録に残らないものがあっても不思議はないし、この事 佐渡の御用金運搬のルートとしては信州通りがメインで、 』にも記されている。 しかし、ほかに四つもの黄金伝説があったのだ。 現存する正式な記録では、わずかに、一七五一 三国通りを

牛の姿は目撃され 棒が、どこからか運び込まれたことがある。それは本陣の中庭に導かれ、やがて出 二つめは、年代ははっきりしないが、 ているが、 積荷のほうは、それっきり持 あるとき、 牛八頭に積んだこも包みの黄金 ち出されるところを見た人は ってきた の延 べ

入らず解散 てどこかへ隠した。結局賊徒は、 た賊徒が襲った。富を蓄えている永井本陣も、 さらに、 画を察知した本陣の主人、八代目笛木四郎右衛門は、金銀財宝を三個の千両箱に詰め テ Щ つめは、 してしまったが、そのときに隠された財宝は、なぜかそのままになったという。 一八六八(慶応 明治維新後、それも一八七七(明治十)年の西南戦争 四)年二月、この地方を「世直し大明神」という 内部に本陣襲撃をおしとどめる者がいて、永井には攻め 彼らのターゲット 下に上がっていたが、明神」というのぼりな のころの話 りを立 ~、事前 で 7

ちだといわれても、 ムしか含まれていない、 円と同等とされ、 金貨や五 東京の 永井に一泊した。そのとき一行は、新貨条例に基づいて明治四年から発行された一円 てとりあわな 警固 円 !金貨を、 のために、 新旧貨幣の交換が行われていたが、 いので、困った連隊の幹部は、本陣に頼、初めて目にする永井の人々は信用しな 軍費として大量に所持 新潟の新発田 小指の爪ほどの大きさの貨幣である。 に駐屯する していた。 「歩兵第三連隊第二大隊」が上京 貨幣制度の移行当時には、 一円金貨は純金がわずか一・五グラ んで旧 61 村人が これが小判 貨幣と取る 、それはにせ金だと ŋ 一枚と同じ値う 替え てもら 両が一 する

結果とし て、 八代目笛木四郎右衛門 の手元に は、 革袋 4 つ ぱ 4 0 新金貨が集まっ た。 そ

者が でも、 41 るかわからな 人目に さを公開 一衛門は つかない場所に隠しておこうと思い立ったのである。 £ \$ してしまったのだ。 みょうな気を起こされてはたい の不安を感じた。 いくら兵隊だとは 両替してや ^ んだ。そこで、 いっても、中にはどんな不心得 ったことによって、は 集まった新金 からずも

沢に洗 革袋を手にしていなかった。 いる。また、 それは一時、 にも語らなかった。 いに行くのを目撃している者もいる。ところが、沢 何事もなく新 本陣 の家族が使う便所の便壺の 発田 どこか の連隊が立ち去ったあと、 7別の 場所に隠し直したらしい 中に隠され ていたと、 から帰ってきた四郎右 四郎右衛門が革袋を引き揚げ のだが、 後に家族 その 場所 が 一衛門は、 を 言 は 7

期を悟 たが 手で何やら必死に書き残した。 のありかを告げようとして 年月が過ぎ、 その中で「金」と「穴」の二文字が、 ったのか、かなわぬ口が過ぎ、年老いた四郎 いるのだろうと思った家族が、 .や手を必死に動かそうとするその姿を見て、きっと隠した金;右衛門は中風を患って寝ついてしまう。あるとき、自らの死 ミミズのは に面する民宿「越路」の、かろうじて読めたとい ったような、 およそ文字とはいえない 石盤と石筆を手渡すと、 うのである。 b 震える 0 だ つ

接聞い 編集者の阿波田 主 た。 一の四つの伝説の詳し そこにはぼくの仲間、天草でいっしょに掘った全日空の古園井俊夫君、 一時彦さん、 イラ い内容は、 スト レー 国道 タ 1 ・の白井 正 さん、 会社 一室で、畠 の 同 の 鈴木俊男君 崩 氏 フ か J 1 5 直

「まさしく、エル・ドラドですね」

ぼくは、ため息をもらした。

ょ 「そうなんだよ。 っとしたら複数の財宝が見つかるかも ŀ ンネルを探し当て て、 しれない」 その中 -を徹 底 的 に 調 べ れ ば、 悪く ても つ、 V

財宝すべてがまだ掘り出されていな Щ 氏は自信満々である。 眼鏡の奥の鋭い眼を、 いとすると、総額はい 41 はいったいる どれくら せた。 b いになるの し四プラス だろ O

「過去にどれかが発見されたという話はないんですね」

ぼくは念押しした。

「まったくな , 二度穴があいたときも、 何か 見つか れば秘密にはできなかったはずだか

六十八歳) との出 もう一つ、 撃的な出 会 41 だ。ぼくらはい 来事があった。 ささか緊張 今回 の発掘資金 していた。畠山 の出資者である仲元虎斎氏 氏に (当時

は肌が合うタイ 「仲元君は、 耳が遠 心いせいか、 戦前 プではないが、 は朝 声が大きく、 鮮総督府の役人で、 君たちもひとつうまくつきあってほしい」 ちょ っと取っつきが悪いんだ。 剣道 の達人らし 61 いかめし 自由 い顔 人のぼくなんかと つきをし て 41

とい は われていたからだ。 の社長さんだ。 してい 「三起工業代表者」とあり、住所は山 もっとも、 第一印象は、 そ のころ社 確かに畠山氏から聞いたとおりだった。 業 口県光市となっている。 0 ほうは娘さんに任せて、 造船や鉄骨関係 自分は埋蔵金探 もらった

そんなことが、ほんとうにできるのだろうか)

ぼ くもそう思ったが、 経歴を聞 いて驚い た。 ح の世界ですでに実績をあげた、 つ

まり、財宝を発見した経験のある人物だったのだ。

信介氏かれている。 地下から、一二六キロも わたって台 日の軍服 てしばらくたったころ、 湾各 の金塊を見つけている。 工作機械。 地に隠した軍需物資類の探索を依頼された。そし 機密文書にあったとおり、 北部 仲元氏 の基隆市では、 は、 後に総理大臣 さまざまなものを探り当て 旧日本軍の施設だった建物 になる同 て、 |郷の 十年

には、 ついでに金鉱 ヨダレが出るほど興味をそそられた。 の調査もやったそうで、 中部の花蓮山中での見事 な露 頭 の 発見 エ ピ ソ

えてい だが 採ることしか知らない けたような露頭が現れたんだ。たまげたねえ。 たツタみたいな植物をガバッとひっぺがしたら、金を塗った手のひらでベタベタあとをつ 山間の小さな村に、 回 ない。まだそのままあるはずだ。そのうちいっしょに行ってみるか ったわけだ。すると、見つかったよ、すごいものが。ある場所で、 村人が大雨が降ったあと、川で砂金を採るというじゃないか んだな。 知り合い こりゃあ、上流に相当い の日本人の医者が診療所を開 ひとりで行 い鉱脈があるはずだと確信 ったから、その場所 41 て いたの 。やつらは、金を川で で 岩壁には ね ねて行 は誰 りつい にも して、 つ

「ぜひぜひ連れて行ってください。見てみたいです」

ときの興奮が醒 東があり、 ぼくはそのとき本気でそう答えたが、台湾の金鉱探検ツアーは、 IP待遇を受けたそうだ。ただし、 仲元氏は、現地では最高級のホテルに宿泊して、運転手つきの車をあてがわれるなど、 でもっと実利 帰国 めやらず、それが尾を引いているようにも思えた。 「の際には、記念品として金杯を三個作ってもらっただけだった。だから、 のある探索をしたいという気持ちが強かったのだろう。 初めから、発見したものは台湾政府に渡すという約 つい に実現しなか を発見した っった

つ ている。 でも、栃木県河内郡南河内町(現下野市)本吉田にある会之田城(別名的場城)の跡は、国大名結城晴朝の埋蔵金伝説だった。埋蔵地の候補として何カ所かあげられているが、仲元氏は帰国後、畠山氏の著書を熟読した。そして、絞り込んだターゲットの一つが、 の隠居所だったとい わ れるところで、 これまでもっとも注目され、 何人か が 発掘を行

らいになり、 のことだ。そのころは、 応を示したので、ブルドーザーを使って大がかりな発掘を開始した。 船を造ると、 仲元氏はここに、 全部を発掘 大量のスクラップが出る。 台湾から持ち帰 造船業界は景気がよく、 費用に回していたというからすご ったアメ それ リカ製の電気探知機をかけてみた。 を回収業者 会社はだ に売却すれ いぶもうか ば って 昭和 月に いたら 四十 · 年 代 四 0 n 41 万 初 め反

こった。 ったん そして一九七〇(昭和 もういっぽうのY家は伝説そのものを信じていない。掘ろうと思った場所が、 の境界付近だったので、Y家のほうからやめてくれという申し入れがあったのだ。 城跡には二軒の家があり、 切り上げ、 かつて結城市に住み、 元氏は、畠 取材をしたことが縁で懇意にしている。 山氏に話をつけてくれるよう頼みこんだ。それが前年の初めのこと。 期間を経て六年ぶりに発掘を再開しようとしたところ、 四十五)年、彼は地下に古井戸のようなものを発見した。 市議をつとめたこともあって、このあたりでは顔がきく。 結城氏の家臣 の子孫であるI家のほうは発掘に協力的 。 だから、 交渉代理人としてこれ 問題が起 そこで ちょ

きたのである。 極的に交渉に乗り出した。そして、 氏が代筆するという条件で、めでたく地主の説得に成功し、 - 交渉に乗り出した。そして、東京の女子大に通っているY家の娘さんの卒業論文を.氏も、それまでの調査の経緯を聞かされ、発掘を続ける価値があると判断して、積 調査を再開することがで

では、その成果はどうだったのか。

とん挫してしまったのだ。 結論を先に言うと、うまくいってい な , , 実は、 途中まではうまく 11 つ て 11 た 0 だ

作会社の社員数名が参加していたが、作業の手順をめぐって仲元氏と水野氏が摩擦を起こ本吉田の発掘には、畠山氏の要請で、赤城山の水野智之氏と、彼が経営する広告看板制 く求められた。 さらにY家から、 これ以上穴を深く掘ると母屋が傾くおそれがあるからと、 の水野智之氏と、彼が経営する広告看板 中断を強

たわけである。 問題がある。そこで、 野氏を組ませることはできないと判断した。かといって、日当を払って人を雇うことにも める意味で、とっておきの場所、永井の発掘を提案した。ただ、畠山氏は畠山氏ももはやこれまでと、中断の決定を下した。そして、諦めきれな 喜んで来てく れて、 しかも秘密を守ってくれそうなぼくに声をか ただ、畠山氏はもう仲元氏と水 い仲元氏をな け

仲元氏の電気探知機は、ここ永井でも上々の反応を示しているらしい。 あとは掘るだけ

「ここまでこぎ着けるには、

部が、永井の住民以外の所有になっていたことだ。 しい観光名所にしようと考えたのだ。 これが最初ではない 畠山氏が、感慨深げにいった。最初に障害となったのは、ここまでこぎ着けるには、いろいろと苦労が多かったよ」 ブルドーザーで掘ったことがある。 ったことがある。経営不振の打開策として、この謎のトンネー九六九(昭和四十四)年に、猿ヶ京の近くにあるレジャー 経営不振の打開策として、この謎 実は、トンネル探しのため 穴を掘ることにした土地 の発掘 ーランド ル を新 は、 0

氏に買い戻してもらうことにした。その費用は仲元氏が負担した。 そのままレジャーランドの所有になっていた。 レジャーランドも所有権を主張することができる。 なことに、そのとき民宿兼食堂「越路」の主人で、元教師の笛木大助氏が売却した土地は、 結局、トンネルは見つからず、たった一度だけの発掘であきらめたようだが、や もし、今回めでたく財宝が発見されると、 そうならないように、この土地を笛木 っか

と支援を得ようと考えた。 次に畠山氏は、気持ちよく作業を行うため、 レジャーランドが、 地主だけでなく、永井の住民すべての同意 掘ったあとを埋め戻しもせず、 ほったら ゕ

きの配分は、畠山グループと村で半々にすることなど、 笛木氏の肝煎りで、永井二十六戸の人々との会合が開しにして住民のひんしゅくをかった過去があるからだ。 何がしかの奉納金を納めることのほか、発掘の期間は一カ月とすること、 中 旬に 合意に至った。 六項目の条件をしたためた契約 かれ、発掘予定地に近い十二神社 発見したと

あるらしい やかな秋晴れの、 遠出をするとき、 絶好の穴掘り日和だった。「晴れ男」という言葉は、 雨にたたられることはほとんどない。とくに、 に、天草で宝探に、天草で宝探

ポート 直撃を受けたときでさえ、 いざ発掘となるとカラッと晴れ上がるとい めてからは、 てくれているようだ。 前 日までの雨 雨はほとんど降らなか がピタリとやんだり、 った、不思議なことが った。 現地 どうやら へ向 かう途中 天は、 続い ていた。 で大雨が降っ の宝 台風 Ø サ 7

とにした。 してあった。 道路より三メートルほど高くなった畑 に穴があいたところは二カ所とも 笛木大助氏の助言によって割り 笛木氏は、 初の発見時に 玉 穴の 道 出 0 上だから、 中に入 一角から、横穴め したポイント ったことが そこを掘 で、 ある 前日 ざし る わ け 0 て その うち 縦 に 代穴を掘り に石 うか 灰でマ りおろすこ な

れ ば、 横 していた。(一次に届くだろう)

道路面との高度差を考えて、そう計算(六メートルから八メートルも掘れば、 Ü

三日で掘り当てるぞ!」

ぼくは意気込ん でショベルを振り上げた

て待て、その前にやることがある

きして、 つ飲んだ。 って、そこらじゅうにまき散らす。 畠山氏が制して、 直前まで神社に供えておいたものだ。 簡単な地鎮祭が、こうして終わった。 用意した塩と御神酒をおごそかに地面にまいた。これは、 そして、 御神酒 ぼくたちもそれにならい、 の入った一合びんを 回 して、 手に手に塩をと 先生が早 ひと口 ず

の の転換を図らねばならなくなった。 が急激に落ちる。 ショベルですくい上げるという、二度手間のすごく体力の消耗する作業となった。 が出てきて、ショベルでは歯が立たなくなり、つるはしでいったん土を掘り起こしたあと、 こならちゃんとした穴掘りができそうだ。ただ、一メートルも掘ると石混じりの赤土の層 で、 穴の大きさは直径一・五メートルと定めた。 地上から引き揚げる装置が必要になってくるのだ。 そして、 肩まですっぽり隠れるくらいになったところで、 つまり、土をショベルで放り出すことができなくなる 天草は湿地帯だからやりにくか 根本的な工法 2ったが ピッチ

めつけるのだが、仲 くはその要領をじ っくり教えてもらった。 元氏の道具の扱 い方は実に鮮やかで、

えて締

その

み合わせてやぐらを組むと、二方向に横木を渡して補強する。

へんはプロの仲元氏がよく心得ていて、

あらかじめ用意してあった三本の角材を組

木と木は太めの針金で結わ

後々のためになるかと思

って、ぼ で十五分ごとに交代した。 がってきたザルから土を一輪車にひっくり返す係、 一輪車で土を捨てに行く係に分け、 の中に入 やぐらのてっぺんに滑車をつるし、 その先に塩化ビニール製のザル って掘る係、 口 l プを引き揚げる係、 口 口 テ プを通し ショ 滑車とロ

体力も意気込みも十分だったので、 ル ランドが掘ったあとの窪地が、 穴から五メートルほど離れた、 埋まっていく。 一日で穴の深



て残 つ ていた。 から受けるショックが、 びて食事をすませたころに、 ってきた。 でも、 とくに、 気分は爽快だった。 の手のひらに、 痛みのかたま さすがにど

が進んで 常生活とはかけ離れた日々 呂だけ使わせてもらいに行ったりもした。 二日 三日目と、 った。夜は、 ほぼ同じようなペースで作業 法師温泉の 「長壽館」に風 およそ

仲元氏に気に入られた。 にウマが合った。 畠山 自分で言うのもなんだが、ぼくたちはよく働き、 宿泊費や交通費を出してくれるのだから、 .氏の心配をよそに、ぼくらは仲元氏とみょう べつに努めてそうしたわけではな 手弁当でもい いとい いったの それ



社員として積極的に雇用しているのだという。 、転げた。 アワビの話。 仲元氏は猥談の名人でもあった。 らなければならない。 聞けば、仲元氏は光市の更生委員で、受刑後に足を洗った元暴力団員なん 身ぶり手ぶりで、 その効果てきめんの様子を語ってくれる。 たとえば、 朝鮮半島で精力剤として珍重される肉の そういった気の荒い造船所の社員たちを統 ぼくたちは笑 かを、

(1 (1)

日目に、縦穴は七メートルに達した。 猥談は効果があるのだろう。

士気を高めるのに、

(もうそろそろじゃないかな)

全員がいったん帰京してそれぞれの仕事に戻り、 O か 白井さんと阿 穴の底や周囲をつついてみても、 田さんを除く三人は、 そこに空洞が現れる気配はまったく 続けて休める 中二日お のは四 いて作業を再開 |日間 が限度だっ じた。 たの で、 自

る確率は低い 八メ ノートル 確な測量をや 九メ ったわけではな トルと深くなるにつれ、この場所に疑問がわい es 0 で、 幅二尺 (約六十) セ ンチ) という てきた。 横穴にぶ 考えてみれ つか

ルから先は、 セ ンチ単位で感触を確かめるようになった。

「あと十センチくらいだろう」

でもダメだったら、

ンチか?」

だろうか か二日ならまだしも、十年も二十年もこれが続 が城の周 辺を掘ってきた先輩たちも、 きっと毎日こんな調子だったにちが いたら、 41 ったいどんな心理状 いな 態になる の日

り降りだけでもたい たロ つ たの かる プを補 もう何回継ぎ足 ルの穴の底というのは、 助的に利 ザルを一回 口 ん テ である。 用して、 しただろう。 ションは三十分ごとに |引き揚げる 二本の太い 三人が ぼくにとってまったく のにも、 しごだけにすがりつく か 針金に角材をくくりつけた、 りで降ろ 初めのころと比 したり引き揚げたりする。 未知 のは不安なので、 べるとかなり手間 の世界だった。 仲元氏手製の O

折っ 石でも、 のような格好だ。 満月よりも小さく感じる。 まるで、 民宿で借 て肩をおおい から見上げると、 アメリカン りた小さめの座布 ットをかぶるのはも 直撃を食らうとも プロテクタ フ 入り口 ット 一代 ボ 豆粒ほどの 団を三角 は頭 1 のすごく ル わ ちろ りに 選手 んだ K 痛 る

掘ってもムダかもしれない。縦穴は十二メートルに達した。もうこれ以上注意しながら、ひたすら掘り続け、二週間後、ヤマ(土砂崩れ)の危険もあった。十分に

に突きささる音。ましごを降りていった中元でまっすぐに落とした。ドスッと、湿った土ンチもある先のとがった金棒を、底に向かっ一仲元氏が、長さ一メートル強、太さが三セ



ままゆ ちがボロボロ崩れている。 ながったら、 かせに引き抜き、 に突きささる音。 ジャ っくりとはしごを昇って地上に姿を現した。 仲元氏は一瞬のうちに闇に吸い込まれてしまうはずだ。それよりも、 ン ターは、 頭 はしごを降りていった仲元氏は、 の上まで振り上げて、 どっとヤマがきたら、どうすればいいのだろう。 いっこうにかまわず、納得の 何度か突き立てた。もし、 ふう 半分近くまで土にもぐった金棒を力ま つ いくまで調べると、 と大きく息をつき、 底が抜けて空洞とつ しかし、 やがて無言の 穴のふ ح 0

「ここまでやな。どうもちごうとるごたる」

畠山氏も、その言葉を予測したように、

「残念だけど仕方がない。 そろそろ雪も降り始めるころだし」

と、総指揮官としての断を下した。

(悔しい。これだけの穴を掘ったのに)

厳重にふたをして、 せっ かく の穴をすぐに埋め戻すことに未練があったので、 次回の発掘まで保存することにした。 分解したやぐらの角材などで

陽が 落ちると、 急に底冷えがしてきた。 村はこ れ から長 4 冬に向か

に に穴があ いたところに、 できるだけ近いところを掘 りましょうよ」

とだった。 翌年の三月初め、 ぼくは畠山氏に提案した。 r s つもより長く感じられる冬を過ごしたあ

から」 「まあまあ、 ぼくにまか せなさ . , 国道のすぐ脇を掘るとなると、 建設 省 の許可が必要だ

建設省高崎工事 宿史蹟学術 もろもろの 先生は落 七面 調査 ち着 倒くさい手続きを経て、 事務所沼田維持修繕出張所に、 61 て を結成するなど、 た。 実はもう、 着々と準備工作を進めていたのだ。 知り合 正式な許可が下りたのは、 W 道路敷の発掘許可願いを出 の大学の先生ら数名の名前を借りて、「永井 梅雨のさなかの七月七 そして、 したのが五月、 所轄 の

な前進だった。 のことだった。 許された期間は、 七月二十八日から八月二十七日までの一カ月間。 大き

そして、七月二十七日の夜、ぼくらは畠山氏とともに上野を発つことにした。ところが、 口から上京して合流するはずの仲元氏の姿が見えない。その理由を畠山氏が説明してく

にするから、仕事は先にやってくれということだ」 で入院したというんだ。新幹線でUターンしていったよ。 「実は、 さっ 元君とここで会ったん ンしていったよ。今月中にはなんとか来れるようだけど、彼が家に電話を入れたら、娘さんが急病 が急病

ちょっと手鼻をくじかれる思いがしたが、畠山氏は続けてこんなことを言う。

かは、 に、 はいよいよという気がするんだが」 不思議にこれが有望だと思えるときほど、 いったことが起きるのだというが、はたしてそれがほんとうかどうかはわからない。でも、 「君たちは信じないかもしれないけど、これまでにも、 みょうにその妨げとなるようなことが起きるんだ。霊能者とよばれる人間や易者なん 埋蔵金には隠した者の執念や、埋蔵工事の犠牲者の怨念がこもっているから、 障害の起きるのが激しいんだよ。だから、 埋蔵金の探索をやろうとするとき そう

喜んでいいものかどうか、複雑な思いだった。

氏 から、交通の妨げにはならないし、 アトリエの前で、昭和十六年にあいた穴の近くらしい。ちょっとした空き地になっている いたところとちがっていたのだ。そこは、水彩画を趣味とする越路の主人、笛木大助氏の から許可証を見せてもらったとき、ぼくは(あれっ)と思った。発掘予定地が、考え 九カ月ぶりの永井は、 相変わらずひっそりとしていた。民宿「越路」に落ち着き、 許可が下りるのは当然だろう。 <u>-</u> Ш

情報が新しい分、 ンネルに到達したい。 でも、ぼくとしては、昭和三十七年にあいた穴の近くを掘りたかった。こちらのほうが、 成功率が高いと思われるからだ。 今度は無駄骨を折りたくない。 確実に

「三十七年の穴に近い道路脇 の斜面を切り取って、 そこを掘りたいのですが」

ぼくは畠山氏に進言した。

「う しん。 それができればい いが、 許してもらえるかな」

念しなければならなくなる。 それもわからないではない。 先生は腕組みをして首をひねる。許可をもらうことを最優先した結果がこうなったのだ。 それを待つことにした。 幸い、 へたな場所を申請して不許可になったら、発掘そのものを断 次の日の午前中に、 建設省の役人が来ることになって

「ダメもとで、 言うだけ言ってみましょうよ」

ぼくの提案に、畠山氏もうなずいた。

った中年男性が降りてきた。ぼくたちを認めても、 黄色い道路パトロールカーが到着し、 助手席から作業服を着てヘルメットをかぶ 表情を変えることなく歩み寄ってきた。

よいよ始まりますか」

低頭して発掘場所を変更したいと懇願した。 一杯の愛想に思える。 畠山氏はすでに顔見知 係長の表情がにわかにこわばる。 りのK係長だった。 そこでぼ は、 平身

話がちがうじゃないですか」

予想どおり の反応だ。 しかし、 ここで引き下がるわけに はい か な 61 ぼ くはあえてし

んとか許 この調査をぜひ に て ただけな やり終えた 成功させたい ょうか」 って と願 11 つ るんです。 ています。 っとも近いところを掘るし そのためにはで

41 ずかだが、 な ので、 係長の心 'の方法についてもぼくが説明するしかない。 心が動いたことを察知すると、ぼくはその場に 連れ て 11 つ 仲元

「斜面を切り開き 土が道路にはみ出さないようにします」 分なスペー スをとって縦穴を掘ります。 の 側 にベニヤを立て

係長の首が小さく上下に動いた。 (よしよし、 W い感触だ

「土は、 もともと発掘許可が下 Ŋ ていた空き地に積みます。 深さ 吨 五 メ ル の穴の 分

十分収まると思 います ڵ

るように見えた。 係長は腕組みをして考え込んだ。 ぼくの説明の妥当性を、 もう一度頭 の中で確認し て 11

も交通に支障のないようにしてくださいよ」 「まあ、 いでしょう。 っかくここまで準備しておられることだし。 だけど、 くれぐれ

ところに置 ぼくたちは顔を見合わせてニンマリした。 いた手でV ンをつくっている。 コゾ ノイは、 係長には見えないように、

と叫びながら、 係長がパト 口 ぼくたちは地鎮祭用の ル に乗り込み、 酒と塩を取りに宿へ戻ったその姿が見えなくなると、 大声で 「やったやった」

三日でケリを つけるぞ!」

それは、

ぼくが以前 にも 口にした覚え のあるセリフだ った。

さ三メ 地鎮祭のあと、まず道端に捨てられていた古看板を利用して、高さ一・四メ ルほどの ついたてを作り 国道の側溝 にぴったりと接して立てた。 そ の

木内兼男氏もその作うなかねまり葉ほど 出す。 れは安全面 ドを落として興味深げに 通過するトラックの運転手が 田さんが筆を振るった「関係者以外 でも 効果があ 史蹟学術調査団」 ·京と月夜野のの一人だった。 を聞く った。 眺めていくから、 中には、 人も 貼り $\epsilon \sqrt{}$ スピー を 車の往来が激しい国道17号のすぐ脇についたてを設置

の七月二十九日、 たば ープ け負って いる て、 現場を 5

0

0

Æ し、発掘に取りかかる。



建会社を経営して

この一帯の

末工

木内氏は、猿ヶ京と月夜

の湯

で土

をしている鈴木岬一氏が引き連れかに、応援団とも見学者ともつか 女子大生、 事か?) と、 明らかに素人と思える連中が、 驚い 阿波 氏が引き連れてきた、 て のぞき込んだのだ。 田さんの友人で埼玉県熊谷市に住む横田嬢らである。 6.1 国道のすぐ脇で工事をやっ 一団がいた。 ムービーカメラ 畠山氏の知人で、 マン志望の後藤英範君と三名のの知人で、東京の美学校の講師 ているのだから、 女の子を含 木内氏は

地下のトンネルの話は知らなかったが、 目的を説明すると、

「それじゃ、おじさんが手伝ってやろう」

きに、ぼくたちはあ と日焼けした顔、 いう感じで、五十歳近いと思われたが、 いきなり穴に入った。上州人特有の義侠心に富むタイプだった。 将棋の角行を連想させるがっちりした体格は、 っけにとら ħ た。 年齢を感じさせない力強さと見事なショベ いかにもこの業界の 短く刈 り込ん さば 人と だ頭

(さすがはプロだ)

ルで汗をぬぐうと、 ほんの十分か十五分の間 軽く三十センチは深くなって いただろう。 木内氏 タ 才

「ま、がんばれや」

世主になろうとは、そのときは夢にも思わなかった。 ひとこといい残し、 飄然と去っ ていった。 この 木内氏が、 後にぼく たちにとっ て救

出され、永井はもう十日も真夏日が続いているという。 この年は典型的なカラ梅雨だった。ろくに雨が降らないうちに、 早々と梅雨明け宣言が

腰を下ろした。 を鳴らして一息に飲み干すと、 いた室内が、彼女たちにとってもオアシスに思えたことだろう。冷えた清涼飲料 七月三十日、 食堂 「越路」の閉め切ったガラス戸を、遠慮がちにあけながら入ってきた。 発掘三日目を迎えた。 タオルで汗をふきふき近くの椅子を引き寄せて、 午後二時を少し回ったころ、 O 風 の若 61 冷房のき どっか を、 女性 のど

でだらしなく椅子に体をあずけているのに気がついたようだ。そのときやっと、テーブル一つを隔てたところに、ぼくを含めた四· 人の男が、 上半

「あんたたち、どこから来たの?」

奥の小上がりから、畠山先生が声をかけた。

「え?」はい、三国峠から歩いてきました」

顔をおおったタオルから目だけ出して、一人が答えた。

で下ろうと思っているんですが、ここまで来てもうくたびれちゃ 「今朝早く上野を発って、 沼田からバスで三国峠まで行ったん で って」 す。 (J て後閑あ

「ああ、東京の人たちかね。 そりゃあ、 この暑さの中 今日中に後閑まで歩くとい うの

厳しいぞ」

「ええ」

二人は、顔を見合わせて諦めたようにうなずいた。

「どこか泊まるところ、ありますか?」

片方がたずねたので、ぼくが答えた。

「ここから村をぬけて下ってい っぱいだろうから、 やっぱり猿ヶ京だね」 くと、 法師温泉があるけど、 宿は 軒しかなくて、 たぶん

師も猿 ケ京も 知らないようだ。

いけどね」 ヶ京にしなさ *(y* 朩 テ ルや旅 館が 41 つ ぱ 41 あるか 5 どこか あ 41 てるよ。 温泉と湖

生がそうすすめ

「このへんはなんにも な いん です

国峠だけを目標にやってきたらしい 汗をやっとふき終えて一息ついたようすの、 もう片方の女性がそう言っ た。 どうやら三

「ああ、 いまのところはね。でも、 あと二、三日すると、 ここは世界的 に有名になるよ」

つけ加えた。 ぼくの言葉に、二人は怪訝そうに顔を見合わせた。 その様子を見て、 先生が笑い ながら

「黄金郷なんだよ、 この永井は」

二人は、まったく意味を理解 元できな W で 11

「エ ル・ドラドだよ。 ま、 いいさ、 じきに わかるから」

ぼくはそう言いながら、 7号としか思えないこの男たち、何を血迷っ二本目の牛乳をとるために、ドリンクケー スに近づいた。

ドラドなどと口走っているのかしら) (道路工事かなんかの労務者としか思えないこの男たち、 て黄 金郷だの エ ル

に背負うと、 彼女たちの胸の内は手にとるようにわかった。 やがて、 小さなリュ ックをさも重たそう

「それじゃ、どうも。 猿 まることにしますから

とい い残し、 炎熱地獄 歌の中に戻れて京に泊り っていった。

をかけた。 ぼくは仲間を促して、汗と泥にまみれたタオルを頭にって、われわれも夕方までもうひとがんばりするか」 汗と泥にまみれたタオルを頭に巻くと、 意を決してガラス戸 ĸ 手

日光を受ける発掘地点は、 裏切られた。朝夕はさすがにしのぎやすいも 日に上半身裸で作業したため、 標高が八百メー トル ある 午前十時ごろには四十度近くになってしまう。 から、 分は 避 暑気分でやってきたのだが、そ 0 Ø 陽が昇ると気温は急激 以に上昇 おろかにも、 0 期待 し、直 射 9

六時までめいっ と涼しくなる。 をとったあと作業を再開。そして、 がある。一つの策として、 力を維持し、作業能率を落とさないようにするために、自然条件を十分考慮する必要 ぱい 掘るのだ。 この日から、午前六時に発掘を始めることにした。 午後三時を過ぎると、 正午から午後三時まで、二回 発掘地点は蛇腹 は蛇腹山の陰に入る四目の休息を入れて 八時に朝食 て、 てぐん 午後

運んで空き地に積み上げた土が、もう五立。 すでにやぐらを組 み、 土はザルで引き揚げている。 米はあるだろう。 一輪車で 五十 X ル 0 離 を

てみたらどうか 深さ二・五メ うのだ。 と助言した。昭和三十七年当時の記憶から、トンネル ートルに達したところで、 の縁のあたりまで進んだが、 ぼくたちは躊躇しながらも、 笛木大助氏が、 なんの感触もな 少しずつ横穴を掘 国道の下に 4 ルの位置は国道の下にに向かって横穴を掘っ め 七 セ

あわ

の前に出てみると、

 $\epsilon \sqrt{}$

た。 てて 建設省の所長が来ていますよ」

の昼過ぎ、

午睡中のぼく

は、

「越路」

の若旦那にたたき起こされた。

った。

H

早朝六時に作業開始。

午前中に深さ四メートル

国道側の横穴も一

メート

調査を中止してもらうしかありませんね」 りますよ。午前中のパトロー 「困るじゃな いですか。 道路の下に横穴を掘ったりしては。 ル隊からの報告を受けて、驚いてとんできたんですよ。

峠まで散歩に出かけていたから、ぼくが矢面に立つしかない。 所長は、強い口調でそう言った。このとき、畠山氏は女子大生たちとい つ しょ 三国

「実は、 地下のトンネルが国道の下にある可能性 が 出てきたものですか <u>څ</u>

必死で弁解したが、所長は、

くり返された。 「そんなバカなことがあるはずがない。 と、声を荒げて否定した。ちょうどそこへ畠山氏が帰ってきて、そんなバカなことがあるはずがない。そんなものがあったらとっ たらとっ 同じようなやりとりが くに 埋めてる

すことにします」 「わかりました。 横へはもう掘りません。 縦穴をあと一メ ŀ ルほど下げたら、

るしかなかった。 「国道にはいっさい手を触 ほんとうに中止命令が出たら、 れないという条件で許 これまでの努力が水の泡である。 可したんですか らね。 ぼくたちはそう約束 約束を守 ò てくだ す

さいよ。 雨が降 ちはがっくりと肩を落とした。 そうい こったら。 穴を覆うシート、 e s い残して、所長はジープに乗り込んだ。 いですね。 危ないと思ったら、ダンプに砂利を積んですぐにとんできますからね」 ついでに言っときますが、雨 それから、 水が流 れ込まない 走り 0 去るジー ように土嚢を作って。危険ですよ 用意が何もされていないじゃな プを見送ったあと、 ぼく で た

掘れば十分で、 だけでなく、村の人の記憶は側溝 道路下に横穴を掘るのがいかに危険なことか、それは十分わか すでに達しているはずだと、口をそろえるのだ。 の下あたりということで一致する。 っている。 縦穴は三メート でも、 笛木氏 ルも

しかたない。 横に掘るのはやめて、あと一メートル だけ掘り下げることにしよう」

ながらも掘り続け、夕刻までに目標の五メートルに達した。穴の周りに変化は起こらない。 こうなると、 てきた。 の号令で、所長 ぼくはトンネルの存在そのものを疑わざるを得なくなった。 砂利の混じらない赤土だけになり、 に約束したとおりのことを実行に移す。 りやすくなった。ムダだと思い 皮肉にも、

の作り話じゃないの?)

それを探すために費や した日々がむなしく感じられてきた。 前年の分も入れると、 すで

ても

ではその言葉を何度も耳にし、 つ てきた。 しか 諦めなくてよかった。 また自ら口に した。 野球でいえば それが 九回裏の逆転サヨナラ (穴はない かも な

月 つぐ 氏とともに、 輿が気ままに揺れ動く。そん 夏祭りでわき返 の木内兼男氏を訪ねた。 な夜が二日も三日も続く っていた。 大型トラックの

なら、 知恵を貸 してくれるかも しれ ない。 相談 してみよう)

で事務所 っ込ん うほど話に ンネル工事のために月夜野に事務所を構えてい込んで、細い穴をあけてみたいというわれわれ 彼は目的がわかっているので話は早 つ ぴをまとった木内氏は、 へ行き、事情を説明すると、 のってきた。 行き詰まったぼ くたちの 明らかに宿酔と見えたのに、快く相談にのってく 頭に浮かんだ、 まだ三十代 削岩機のようなものを、 と思わ るC工業に連絡をとってくれた。 の案を受け入れ、 せめてもの れ る若 い所 打開策だった。 長は、 すぐに、上越新幹線の 国道の下に向 こちらが面食 かって が用 れ その足 た の 白

「おもしろそうだなあ。 ۴ リル を持 9 て、若い者と 11 つ ょに行ってあげよう」

「あのう、費用のほうは。 なにぶん予算がない もので」

ぼくは心配になってたずねたが、 所長はかぶりを振る。

設所有のものだ。 「なあに、そんなものいらないよ。 昼過ぎ、 大型の コンプレッサーとドリルマシンが現場に到着。 ちょっとしたレクリエーショ コン ンのつもりで行くから プレッサー は木内建

その先が赤土の壁を貫き、 実にあっけなかった。けたたましいドリルの音が響き始め ズボッと吸い込まれたのである。 ほんの十秒か十五秒後に

「あ

と息をのむだけで、 ない出来事であり、 とをして、そのとおりの結果が出たまでのことだ。 この先に空洞があるはずだから、ちょっとドリルであけてくれと頼まれ、 若い作業員が、穴の底から感動のかけらもなあいたよ」 それがあまりにも簡単にいきすぎたものだから、 声も出なかった。 い顔をぼくたちに向けた。彼にし しかし、 ぼくたちにとってはとてつも そのとおりのこ (うそだろう) てみれば、

作業員は、一度ドリルを引き抜き、 て再び突き立てた。 れて、 ぽっ かりと黒 直後に、周りの壁がド 41 闇 が 現 少し場所をず れ た。

・ったー う !

いる 誰かれの区別なく、 もう疑う余地はない。我を忘れて狂喜の声を上げ、 に上がっ 氏を振り返ると、 い間心に引っかかっていたトンネルへの入 の端が震えているようにも見えた。 ぼくたちとは比べものにならないはずだ。 崩れた壁の厚みは二十 てもらい、 目の前に姿を現したのである。 めちゃくちゃに肩をたたき合っ 無言で歯を食いしばって コゾノイとぼくが穴の センチほど。 無理も ŧ



つまり、 メートル て たの 路面 くら りだ である。 のわずか二メートル下に、 下だったが、トンネルの天井はそこから五十センチほど上にあった。 建設省の所長が知ったら、 想像以上に大きな穴で、ドリルが崩したところは地面から このような空洞が激しい振動に耐えて、 肝をつぶすにちがいない

天井から落 いた。 ンネル 昭和三十七年に ちたと思われる土がこんもりと積もっている。 さらに一メートルほど下にあった。 埋め戻したあとだろう。 崩れ落ちたばかりの土の下に 左手はすぐに行き止まりにな 9

「やっとこいつの出番が回ってきたぞ」

ている。 け中に入ってみた。 白井正樹さんが、 これも、村の人たちがいっていたとおりだ。 右手は急角度で下降していて、三メートルほどでほぼ直角に右に折れ嬉しそうにヘルメットにキャップランプを取りつけ、点灯して少しだ

「さて、ここでいったん引き揚げだ」

になっていたから、 険だ。酸素の状態や有毒ガスの有無を調 で外気を送り込み、 興奮をおさえて、畠山 中に入るときにはそれを使って安全を確かめればよい。 まる一日待つことにした。 **氏が号令をかけた。閉鎖空間だったト** べなければならな C工業から酸素検知器 61 -ンネル とりあえず、 も借りられること にすぐ入る コン プレ ッサ

だったから、 残念なことに、ぼくはこの日の朝、 こる思いで、ひとり永井をあとにするころ、黒い雲が空を覆い、 シートをかぶせたから心配はない。 らもらってきたビニールの大きな肥料袋で、 東京に帰り、次の日はどうしても出社しなければならなかった。 会社に電話を入れて、休暇を一日引き延ばしたばか 土嚢を作って穴の 周囲を固め、 小雨が降り出した。 後ろ髪を 上から

畠山氏の提案で、 本格的な調査は、仲元氏がやってくるはずの週末の八月五日から始めることになった。 トンネル内の安全が確かめられても、 初めは大まかな検分だけにとど

のだが、 宝を求め、 月四日 今度こそ、すばらしい大団円への花道になるような気がしていた。 の夕方、ぼくはコゾノイ、 四たび永井への道をたどることになる。毎回少しずつ気持ちにちが 白井さん、鈴木君の三人とい っしょに上野を発った。 $\epsilon \sqrt{}$ がある

舎に愛着心のようなものがわいてきた。 クシ 越線 ーをとばす。 の後閑駅に着いたとき、ここへ来るのもこれが最後かと思うと、小さく淋 バスを待つのももどかしく、後閑から永井へ直来るのもこれが最後かと思うと、小さく淋しい

娘さんの病状が落ち着 って空気の状態が安全であることを確認すると、有力な場所を三カ所チェックし へとんぼ返りしたとのことだった。 民宿 「越路」では、畠山氏と後藤君が、 いて、やっと八月二日に駆けつけることができたが、トンネルに入 五日にはまた顔を見せるという。 二人だけでぼくたちを待っていた。 仲元氏 て、 は 山 П

(財宝が、 暗闇のどこかで早く日 0 目を見せてくれと、 ぼくたちを待 つ て 41 る

そのことを考えると、なかなか寝つかれなかった。

業のときから一変した。 たからだ。 食事をすませると、 が、 裏山 Tシャツの上に長袖のスポーツシャ の十二神社に 参拝 く ï やりとして、 最後の祈 寒ささえ感じるほどだと ツを着込み、 願をした。 服装は地上 ゴム長をは で

それにしても、よくこれまで崩れずにもったものである。 と変えたそうだ。 日に現場にやってきて、 型の懐 装備 大型トラックが大地を揺るがせて通り過ぎてい 面を三メートルほど滑り降り、 知の暗闇への入り口が、 中電灯を三つ、そしてめいめいがキャップランプをつけたヘルメットを装着する。 つるはしとショベルのほかに、単一の乾電池を四個入れる強力なライトを三つ、 この現実を見せつけられ、 ぼくたちを誘うように待ちかまえていた。 さらに右折する細い通路に足から入り込む。相変わら った。天井が崩れたら一巻の終わりだ。 びっくりすると同時に、 建設省の所長は、 すぐ右手から始ま 穴のあい 態度をコ た翌 口 ッ

ただし、 「おそれ入りました。とにかくおめ 二週間後には、砂利 で埋 めさせてもら でとうござい いますから ます。 中 は心 ゆくまでお調べ ださ 61

で前 約六十センチ、 国道の路面からおよそ五メ 進する。こういうとき、身長 高さは、前 から聞 آ ا が一メ 41 ル 下 て いたとおり一 レベル ŀ ル に、 ・六メー センチある トンネル が ŀ ぼ 水 ル 平に掘 ほどか。 は不 剤 ら 前か てい が み た。 0 姿勢

ったので安心だが、 地下 のような背をのぞかせ、 e s ざというときには、このホ 水が十センチくらい 落盤など不慮 それが延 の深さに溜 の 1 事故に備えて、 々と奥へ向かっ ス でト ま つ てい ンネル内に外気を送り込めばい た。 木内建設 水面 ていた。酸素検 から 硬い 0 コン ゴ 知器 ム プレッサー 朩 は スが 4 異状を示さなか は借 まる りたま で

をか それを体験した。 真の闇というのは、 っと見開き、首をぐるりと回しても、 ためしにライトを全部オフにしてみると、まさに「一寸先も 日常生活の中にはなかなか存在しないものだが 目に入るものは何もない。 ぼくはこ 闇」 0 だ。 とき、 目

こから左 込んでいるが、 突き当たりまで二十五メー うな文字を見 やっと入り込めるほど。左手は比較的ラクに進むことができて、 あったと話 卜 天井がドー ンネルはわずかに蛇行 に二本の通路が続 つけた。 していたが、 これが昭 ム型になっ 和 て トルあっ 実際には いて、 六 てい 年に 三十メー 埋め て、 床に上が せいぜ 右手の 5 ŀ が 奥部には、砂利がほぼ ルほどで「広間」に出た。 三畳、 たあとだろう。 一メート ほうは、 一坪の広さだ。 ル以上もうずたか きた土 側 四十五 距離を測る 一のため 0 壁面 落盤 村 くな に 度の角度でなだれ に腹ばい 0 ると よるも 人 墨で書 は つ て 四畳半ぐ こちらは *()* になって 0 る っだろう e s

〈昭和三十七年八月三十一日にはいる。永井 高橋良男〉

何とかそれが読みとれる。

こで きは る わ てきた。 0 かり 右手 メ ぼ いみがあ ところどころ、 のような鍬 のほうは まりになっている。 だった。 るが、 距離が短 のあとが残る ح 高さは 胸の高さくらい れ は 4 ーメー 明か し ショ ŋ っ を置 とりと水分を含んだ壁 ŀ W ったい ル 七十 に、 41 た場所 4 センチと、 り口を広げてもぐり込ん 鍬の先を打ち込んでつくったと思われ つごろ掘られ だろう。 に、 かの の たのか、ますます興味 あたかもたったいま 方 部分 が なすすで (よりも でみる 高い。 黒く ح 9

白井さん なさそうだ。 ぼくたちは念入り ンネ ルに入る前 ĸ 周り の壁を から、 つつ 最奥部に宝庫 いた ŋ 削 つ た へ の ŋ 入りり口 たが がある どうやら はずだと主張し そ 可 ラ 能

「足もとが怪 しいんじゃない?」

ぼくが思ったとおり、 最奥部の一メー トル手前 に、 わずかに土が盛り上がったところが

なり回ったころ。 の作業に意外と手間取り、 の一人である仲元氏をさしおいて掘 元氏の到着を待ってからだ。 いちばん頼りになるようだ。 ぼくたちは小躍 お年寄りの二人が苦労なく入ることができるように、 暗い りし た。 穴の中にいると、 すぐにでも掘 何とかかがんでくぐり抜けられるようになったのは、 金属探知機の反応を調 り出すわけには 時間の感覚を失ってしまう。 り起こしたい 41 ベ かな てからのほうが確 ところをぐっとこらえた。 入り口を広げることにした。 41 とりあえず、この本命地点 こんなときは 実だし、 正午をか 腹時計 ダー ح

だ?) のだ。 スを迎える。 昼食後の休憩中に、 ぼくたちは期待に胸をふくらませた。 台湾で金塊をキャッチした探知機が、 仲元氏が勇んで駆けつけた。 ところが 国内での埋蔵金発見第一号を演出するさあ、これからいよいよクライマック 仲元氏の手にそれがない。 (なぜ

「危なくて、 ここでは使えん のじゃよ」

ム長をはいてい ば大きい。それがメ て地下の電気抵抗 聞けば、 た仲元氏は、 な検知器を使うことにしていた。 この器械は地中に二本の電極棒をさし込み、 代わりに性能の点ではかなり劣るが、同じ原理の電気工事 ても感電してしまうおそれがあるというのだ。 を計測するしくみで、 ター の針の振れ方でわかるのだが、 (それが役に立てばいいのだが) 金属が埋まっていれば抵抗は小さく、 一千ボル 地面に水分が多いと、たとえゴ 事前に場所をチェックして トの電流を瞬間 用のテ こもなけれ 的に ス タ

ぼくたちが目をつけていた場所、 とくに、 最奥部の本命地点は念入りに検査してもら

「はっきりとはわからんなあ」

されているかどうかは判別がつきにくい。 それでも、ぼくたちは希望を捨てずに、三カ所の試掘をやることにした。 仲元氏が首をひねる。 針の動きは微妙に変化するけれど、そこに金属、 本命地点は二番目だ。 (やはりあの採知機がないとダメなのか?) まず、 入り口から広間へ向かう通路のほ つまり金が 楽しみをなる ぼ



横穴は何とか立って歩ける高さで、 の交点部分はドーム状になっていた (下)



赤土のようで、 うことは、 とがった直径三センチほどの鉄棒でつついてみたが、 を掘ることに そこが過去に何らかの細工を施された場所とも考えられる。。ことにした。水がもっとも多く溜まっているところである。 異状は発見できな 思うにまかせず、 さほど深く掘り下げることができずに中止 壁の土と同じような小石混じり しか くぼ みがある した。 通路

は水分が少なく、 次に、右手の奥の本命地点に移動した。 水溜まりもない。 ドキド キしな がらショ べ ル れてみた。

「石も混じっていないから掘りやすい。 いよいよ怪しいぞ」

「埋めるとしたら、 ンチと、穴が深くなるにつれて、 コ ゾノイの顔がほころんでいる。 一メートル以内だろう。それ以上深くする必要はない ぼくたちの動悸もしだいに激しくなっていった。 交代で一人ずつショベルを振るう。 セ 作業も ンチ、 四十 お

んぱんに往復する。 元氏の言葉が、 持ち手の手が汗ばんでいるのだ。さらに意気を高揚させた。ライトの光源が右から左、 そして右へとひ

ごとだから」

止まった。 深さが五十センチほどになったとき、 自らショ ベルを手にしていた仲元氏 の動きが

「ダメじゃ、ここにはない」

の地層であることは、素人目にもはっきりしている。 見ると、ショベルの先が硬い砂混じりの層にぶ つかっ て 11 た。 そこから下が 自 0 まま

出されたとか」 「ここまでは土が軟らかだったんだから、 金を埋蔵する予定だっ たけど、 途中で気が変わっ、誰かが一度掘り ったとか、あるいは、すったあとだという可能性 はあ で に りま

ぼくは大ざっぱに推理した。

「何ともいえんが、ないことは確かだ」

意外にも、仲元氏はさほど落胆したようすを見せない。

った。 引き続 いて、 左手 の通路 の奥の 水溜まりも少し掘 ってみたが、ここも何ら手応えはな

入り口はふさがれてしまった。 た。そして、二週間後には、 事の都合もあって、 く自身は、 建設省の通告どおり、 トンネル内 ダンプ三台分の砂利とコンクリートで、の調査には正味三日しかつきあえなかっ 9

のトンネルがいつごろ誰の手で掘られたかも調べ上げた。 かく積もる土のへりの部分から、 収穫ゼロ。ぼくはそう思った。 納得できない畠 カメのかけらと松明の燃えかすを掘り出した。納得できない畠山氏はその後、一坪ほどの広問 一坪ほどの広間にうずた また、

キリシタンの里として有名なところだ。さらに、永井の笛木恒氏の家には、戒名の上に 「ウハ いう男で 本陣の子孫の家に残っていた記録によると、 ている字を組み合わせた、文字とも記号ともつかないもので、曹洞宗(禅宗)の寺ッキョク」が書かれた過去帳がある。これは、「烏」と「八」と、「臼」の下の横棒 原 時は江 乱 の信 戸時代後期の文化年間(一八〇四~一八一七年)。松之山といえば、隠れ 徒三千 の首塚にも 意味はわかっていない。ところが、 同じも のがあることから、 掘ったのは、 越後の松之山から来た鶴松と 熊本県の天草に残る、 キリシタンの冥福を祈

山氏はこう推理 の目を欺くために作られたのだと言う人もいる。 ここからは謎の部分もあるが、

ろうか。 ある 東京で畠山 タンだった 「永井 以上の後日談をぼくが耳にしたのは、 4 本陣 いずれにしろ、財宝を隠すことを目的として掘 のかも をはじ 氏と再会したときだった。 いざというときに逃走するための秘密の通路にするために掘 しれない。そして、トンネルは、 ひ ょ っとしたら二十六戸の先祖すべてが、 全員が永井から引き揚げ 隠れ て礼拝を行うため った穴ではないということだ」 江 てしばらくたってから、 戸 ったのではないだ には の場所として、

を知っていた者が、その穴を利用したことになるが」 8 Ĺ あ のトンネルのどこかに宝が隠されているとすれ ば、 キリシタン の穴があること

山氏も、まだ諦めたようすではなかった。

「広間に積もった土の下は、 なんですけど」 調べることができませんでしたよね。 あそこが W ち ば ん心

ぼくが言うと、 山氏もうなずい た。

すい場所にもう一度穴をあけて、調べられればい 「宝物でなくても、 キリシタン関係 のものが出てくる可能性はあるからね。 もっと入りや

の世を去った。 こわして十年あまり入退院 ら二年間ほど、畠山氏は、 そういって遠くを見つめていた畠山氏の姿が、 ほかの二カ所の調査に専念したが、めぼしい成果はなく、 をくり返した末、 一九九一 (平成三) 年の三月、 いまでもまぶたに浮かんでくる。いんだけど」 八十五歳でこ それか 体を

ぼくらはその後、 仲元虎斎氏と組んで猿ヶ京のある場所を掘り、 続いて、 それ 以 (23)

から仲元氏が執念を燃やしていた、結城晴朝の埋蔵金探しを手伝うことになる。